◆2021 年 10 月第 4 週の礼拝奨励

■日時：2021 年 10 月 24 日（日）10：30－11：30 降誕前第 9 主日

■場所：立川教会

■奨励：中川和子さん

■奨励題：「たれか洩るべき主の救いに」

■交読詩編 19：1－7（p24）

■聖書：コリントの信徒への手紙一 1：26－31（新約 p300）

■讃美歌：402「いともとうとき」・433「あるがままわれを」

今回お話をさせていただくにあたり、何をお話すべきかと悩んで姉に相談したところ、「こんな自分でも生かされている、みたいなことでいいんじゃない？」と返事が来ました。自分でもそういうことになるだろうと思ってはいましたが、姉とは言え、他人から改めて言われるとやっぱりそうなんだ、と少し落ち込みました。

私のどこがそんなにダメなのかと言いますと、一言で言えば「役立たず」なのです。小さい頃から手も足も口も頭もすべて遅いうえに、すべきことになかなか手が付けられない。何をするにも人の何倍も時間がかかります。

そんな私ですが、何度も危ない命を救われているのです。その例をお話しようと思っていましたが、時間が足りなくなりそうなので、いつかの茶飲み話に取っておくことにします。

総括すると、私は「危機一髪」と「渡りに船」の人生を歩んできたように思います。「渡りに船」の方の例を一つ挙げさせていただくと、これまでに引っ越しを 5 回ほどしていますが、そのうちの 3 回は、私たちが引っ越し先を探していると知った知り合いが「ちょうどあそこの家が空くけどどう？」と紹介してくれたものです。他の 2 件も知り合いが見つけてくれたもので、私たちは自分で家を探したことがありません。

このように他の人に支えられ助けられて何とか生きていた私たちなのにちゃんとした

自覚もなく子どもを産んでしまいました。そして、下の子が 3 歳で自閉的傾向のある発達障害と診断されました。帰宅して姉に自閉の特徴として聞いたことを電話で伝えると「あんたの小さい時と一緒じゃん」と言われ、一瞬「え？」と思いましたが、すぐに「ああ、そうか。そうだったのか。」と納得しました。それまでどうしてこんななのだろうと思っ

ていたことに名前がついた安堵感、とでもいうような感覚でした。こうして障がい者が障がい児を育てる生活が始まりました。

当時通っていた教会には「若葉の部屋」という、子どもと一緒に礼拝を守ることのできる小部屋がありました。多い時には5組くらいの親子がいましたが、その中の3組に障がい児がいました。これもかなりの高確率で、「神さまは越えられない試練はお与えにならないというけれど、私たちは教会に通う者として選ばれたということか」と思いました。その中でも、能力の低い私には比較的軽い子を任せて下さったのかと思います。

もちろん一人で育てられるわけはなく、実家をはじめ、幼稚園や学校の先生方など、色々な方の助けを借りてやっとここまで来ているわけですが、中でも上の子は下の子が生まれて以来ずっとけなげに「障がい児のきょうだい」の役割を担ってきてくれました。

障がい児のきょうだいというのは大変な立場で、積極的にかかわってくれる子もいれば反発する子もいるようですが、娘の場合は弟を小さい頃からかばってくれていました。後年聞いた話なのですが、小学校の頃はいじめられていれば助けに入ってくれることもあったそうです。大学生になると比較的時間が自由になるので、私が仕事で保護者会に行けない時など代わりに行ってもらうこともあり、「若いお母さんだと思ったらお姉さんだったの」と言われることもよくあったそうです。

そのように陰に日向に助けてくれて来た娘ですが、その間ずっと我慢してきたものが心の中にマグマのようにたまり続けていたようで、数年前から仕事のストレスなどの影響か、少しずつ外に出てくるようになりました。時には噴火することもあり、その激しさから初めのうちは反発しか感じなかった私ですが、だんだん娘の言うことが沁みてきて、確かにそうだった、助けてもらうことが当たり前のようになっていた、感謝を表す機会が少なかった、と思うようになりました。反抗期を経験せずに成長してしまうと大人になってからより深刻な問題を引き起こすというようなことが言われますが、まさしくそれだと思います。

それを受けて、私はこれからは娘の心にたまったマグマを流し、空洞を埋めることに力を注ぎたいと思っております。世界中に助けの必要な人はあふれかえっているのに、そんな小さなこと、家族の一人の心の平安を保つためだけに力を使うなどということが許されるのだろうか、という疑問もわきますが、マタイによる福音書25章40節にもあるように、神様は「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」とおっし

ゃいます。世界中の困っている人々に手を差し伸べることは尊い働きですが、誰もがマザーテレサや中村哲さんのようにできるわけではありません。人それぞれ、与えられた力や場に応じて働くことに価値の違いはないと信じたいです。自分が生

きるだけで精いっぱいの私には、最も身近な人の精神を安定させることさえ難しいかもしれませんが、当面はそれを目標に生きていきたいと思っております。